

所属・資格 国文学科・教授

申請者氏名 鈴木 晴彦

研究課題		日本近世書学の研究（和様書家と唐様書家との認識の相違や相互の受容関係について）
報告の概要	研究目的 および 研究概要	江戸時代の書道は、すでに宮中や武家において文書・記録を司る右筆職が存在し、そこから派生した和様書の世界で独自の様式美を墨守していた。しかし、この時代にはとくに新興の唐様書が加わった。彼ら新興の唐様書家たちの多くは、門弟を連ねて一家を構え、個々に書法観を提唱することによって、しだいに江戸時代特有の書道文化を形成していった。つまり、江戸時代特有のいわゆる流儀書道である和様書が一般に広く普及したことに加え、進取の精神に満ちた中国風の書風である唐様書が流行し、二層構造的な書道界を成立させ、それがしだいに混然一体となって展開したところに、この時代の特色を見いだすことができよう。本研究の目的は、かりに上記の状況が存在するのであれば、それを明確に導き出すことにある。
	研究の結果	中国伝来の唐様書法を信奉する唐様書家が、中国書法を絶対的に重視したのは当然のことであった。この論点については、すでに拙論にて王羲之書法を最終目途におき、その書法の受容に励むことの意識について論じてきた。一方、その用途が大衆化への道を歩んだ和様書は、師資相伝的な意識がより強くなり、もっぱら前代の書法を踏襲するだけに終始したことは、周知の通りである。 しかし、いかに和様書が沈滞的な機運にあったとはいえ、それによって唐様書が和様書を席卷しつつしたわけではない。むしろ、時代の要求にうまく対応し、その二層構造的な成立展開の下で互いに住み分れがなされたと考えられる。本研究では、この住み分けの詳細なデータ収集とその分析について、継続しているところである。
	研究の考察・反省	唐様書の新興的な隆盛が和様書の沈滞的な機運に対して、少なくとも何等かの作用を及ぼすものが存在したのではなかろうか。つまり、進取の精神に旺盛な唐様書家の活躍があれば、同時代を共存していた和様書家の意識に、いささかなりとも敏感にならざるを得ない状況が存在していたと考えられる。 上記の点に注目しつつ、これまでのいささか総論的になりがちな論点を掘り下げ、各論的な内容へ進めるために江戸期和様書家と唐様書家の交友関係等を綿密に調査し、個々の人物のその時代に果たした書道的な意義を明確にしたい。このことが、引いては江戸期の書道史の全体像を捉えるキーポイントになると考える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究発表：全国大学書道学会・第60回大会 細井広沢考—『先哲叢談後編』を中心に— 平成30年10月13日 跡見学園女子大学</p>	